

「ダボハゼ的」な就職活動

ふく やま とおる
福山 透

東京大学大学院薬学系研究科

挙式直前の苦行

博士審査の翌日、岸さんのオフィスに行くといくと机の上にマヨネーズの空きビンみたいなものが鎮座していた。私はそのとき日本への一時帰国を3週間後に控えていたのだが、mitomycin Cの全合成を早く終わらせたい岸さんは、私もチームに加わって、12段階ほどで合成できる鍵中間体を一時帰国までにビン一杯にしてほしいというのだ。今回の帰国は、前年の夏に宗像先生宅で見合いをして3回会っただけで決めた相手との結婚式のためで、日程は変えられない。馬力全開で3週間働き、やっとの思いでモノをビンの8割がた詰めて岸さんに報告した。私は「80% full」、岸さんは「20% empty」という見解であったが、その中間体を使い、おもに中坪文明先輩が確立したルートに改良を加えて半年後にはmitomycin Cの全合成が完成した。

博士論文の仕上げとこのハードワークで痩せ、まるで抜け殻状態の私を見て、羽田空港まで迎えに来た家内は「あのときは別人みたいだった」といっている。結婚後はそのリバウンド(?)からか順調に脂肪を蓄えつづけ、かつての面影はすでない。

「アメリカで就職したらどうだ？」

家内には「2、3年後には日本にもどる」といって結婚した



岸さん、中田さんとカレイ釣りに行った私の左が家内で、大きな魚にご満悦なのが岸さん。

のだが、実は具体的な就職計画などなかった(漠然とだが、もどる気でいたので騙したわけではない)。恩師の後藤先生から助手として名大に帰るようにとのお話もあったが、アメリカの自由な空気を吸いすぎたせいかわかんない。そんなころ岸さんが、「アメリカで就職したらどうだ」と助言した。結婚を決めたときもそうだが、元来「衝動買い型」の私は「それもそうですね」と、アメリカでassistant professorのポストに応募することにした。

岸さんの情報とC & E Newsの募集広告をもとに10大学ほどに応募書類を郵送した。5大学から面接に来るようにとの返事があったが、なかでもテキサス州ヒューストンにあるライス大学からは投函数日後にさっそく電話があり、翌週早々面接に来るよう依頼があった。のんびり構えていた私は慌ててセミナーの準備や旅の支度を始めた。岸さんも心配だったようで、「ちょっと僕のオフィスで予行演習してみろよ」とのこと。しゅしゅ英語で講演すると、あまりの下手さに岸さんが呆れ返って含み笑いをするので、私の心はいたく傷ついた。「岸さんと日本語でばかり話していたからこうなったんだよ!」と、責任転嫁してみたりしてね。

“冴えた勘”とでもいいですか…

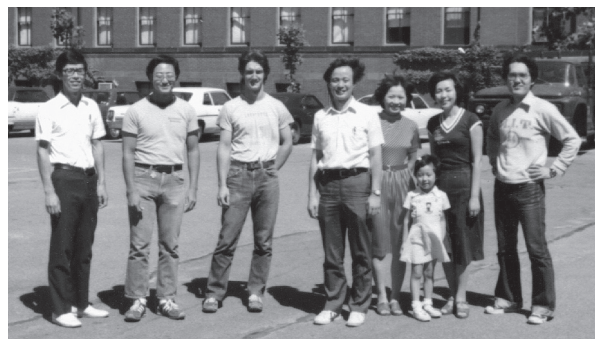
岸研のアメリカ人からは、「テキサスはカウボーイハットをかぶってブーツを履いた野蛮人がたくさんいるところだぞ」とからかわれたが、私も西部劇で見たようなサボテンと砂漠のイメージを抱いていた。しかし11月中旬にボストンの空港を飛び立ち、ヒューストンの空港に近づいたとき、一面に緑が広がった大地を見て、イメージとのギャップに驚いた。ボストンの気温が6℃くらいだったのに、ヒューストンは24℃だったことも強く印象に残っている。

ライスは「南部のハーバード」とも呼ばれる私立の名門で、規模は小さいが非常によい教育環境を誇っていた。化学科長は著名な有機化学者のErnest Wenkert教授で、彼の息子のDavidはWoodward研の院生で私の友だちだったし、

laboratory director (事務長) の George Busby も Woodward 研出身で気心が知れた仲だった。日本の事務長と違って、アメリカの化学科では Ph.D. をもった化学者が事務全般や学科業務一般などに広く関与し、日本の教授会で話し合う事項のかなりの部分を学科長と 2 人で決定・執行する。したがって毎月 1 回開催される教授会も 1, 2 時間で終わるのが常だ。話はそれだが、そんなわけで訪問する前からライスには親しみをもってた。それに実際に訪問して美しいキャンパスとこぢんまりした家庭的な雰囲気に好感がもてたし、有機系の教授たちもいい人ばかりだった。講演はどうだったかって？それは不問に付しましょう。

それから 1 週間後、今度はイリノイ州立大学の面接に行った。トウモロコシ畑に囲まれたこの名門大学の化学科はハーバードよりも圧倒的によい設備を誇り、教員数もライスの 3 倍近い。研究レベルも印象的だったが、海から遠いのが島国育ちの私には気になった。ちなみにここで、私の下手な講演を岸さんの次に聞いた日本人がいる。只野金一さん(現慶応大学理工学部教授)が、Kenneth Rinehart 教授のもとでポスドクをしていたのだ。後年、日本に帰国してからお会いしたとき「はじめまして」といったら、「いや実は以前にも会っているよ」ということで意気投合し、それ以来「金ちゃん」と呼ばせてもらう仲である。

イリノイで面接して間もなく、ライスからオファーが来た。あそこならきっとよいスタートが切れると思ひ、イリノイ州立大学の結論を待たずに OK してしまった。結果的にはよかつたのだが、まさしく「衝動買い」。人生をやり直すとして、



ハーバード最後の日
1978 年 7 月 2 日。中田さんが撮影してくれた。

また残りの 3 有名大学への訪問をキャンセルするかと聞かれると、「ウーン」、迷うところですねー。

ハーバードでの最後の仕事

就職活動を始めたころ、当時としては合成上最難関に匹敵する天然物 monensin (1) の構成 THF 環の立体制御ができるなら全合成に取り組もうと岸さんが提案した。さっそく分子模型をいじってみると、THF 環 (3) をつくるにはエポキシケトン (2) のケトンとエポキシサイドの二つの酸素原子をルイス酸に配位させれば環上の二つのアルキル基を避けるようにケトンが還元される可能性があると感じ、1 週間ほどで Li^+ をカウンターイオンにもつ還元剤を作用させることでこの問題の解決の糸口を掴めたので、全合成を開始することになった。研究が進むにつれて、さらにポスドク 3 人と院生 1 人が加わって短期決戦体制がしかれた。私はおもに右部分を受けもっていたが、それが終わってから左部分の合成の加勢にいった。その後、30g の天然 monensin をクロム酸酸化して得た 2 種のラク톤をすでに合成済みの左右中間体に誘導し、私がハーバードを去る 2 週間前に monensin の合成を完成させた(といっても、天然物を分解してまたもどしたただけなのだが)。

わずか 9 か月の急ぎ働きだったが、C, H, O の化学は N とか S を含んだ化合物に比べて安定で、いろいろな反応が使えるなあという感触をもった。

ちょうどこのころバミューダ島行きの順番が再び回ってきて、家内も連れていこうと思ったのだが、岸さんがバミューダの「バ」もいわないので、「monensin が完成するまでは行ってほしくないんだな」と察して諦めた。そのおかげで、今でも家内に「ナイアガラにもバミューダにも行けなかった」と責められている。

